



JR東日本カップ 2005 第79回関東大学サッカーリーグ戦(前期) 1部リーグ 第3節

ロスタイムでの失点に、敗戦したかのような表情を浮かべるイレブン。失った勝ち点2を取り戻すべく、前進していくしかない(撮影・野澤俊介)

駒澤大学 2-2 順天堂大学 前半の2点リード生かせず 目前で勝点3逃す

技術 戦術以前の 戦つ姿勢に疑問符

「最後が全て」(筑城)。「ああいっ形で追い付かれたら集中や精神力がダメだ」ということ(赤嶺)。後半ロスタイムでの失点で敗戦同様のドロクを演じてしまった駒大。選手達の口から聞かれた言葉は反省の弁ばかり。開幕3試合で勝ち点4、6位とスタートダッシュに完全に失敗した。

如何せん昨年まで完遂されていた前線からのプレスが鳴りを潜めてしまっている。プレスをかけるタイミングが半歩遅れることで、効果が半減し、攻撃に滞りを引き起こしてしまっているのだ。結果DFラインからのロングボールに頼る単調な攻撃に終始し、相手に容易にボールを力ツトされ、逆襲を食らうという悪循環に陥っている。新チーム発足後、まだ間もない時期とはいえ、チームとしての戦い方が確立されていない点は非常に気にかかる。

また、ピッチ上に本場の意味でのリーダーの不在もこのチームの課題であろう。この日も前半は21分までにセットプレーから2点をリードし、順大をシュート0本に抑えながらも、後半左サイドを破られ1点を返されてからは、サイドチェンジのパス

を1本のパスで通されるなど、タジタジの状態。こつこつと苦境に立たされた状況の中で、声を出してチームを鼓舞する精神的支柱となる選手が、残念ながら現在の4年生にはいない。今後の迎えるであろう危機的状況下でキヤプテンシーを発揮できる選手の出現は、上位に食い込んでいくためには早急に望まれる事態なのである。

しかし、一番の問題は秋田監督の言葉の中にある。この日、前節 法大戦とスタメンの入れ替えを行った理由について「戦わない選手がいた。一生懸命やらない選手は使わないのが僕の主義」。もし問題が、技術 戦術以前の、戦つ姿勢にあるのだとしたら、チーム事情は非常に深刻である。ロスタイムに失点を喫するのも致し方ないところか。それこそ王座奪還などは夢のまた夢であらう。この3試合で見えた課題を克服しつつ、次節 流経大戦以降は選手達の奮起を促したいとこらだ。

(遠藤雅之)